桃洞遺筆 第二輯 卷下

特別
二1
4263
6

二1
4263
6

河内國立圖書館文庫

桃洞遺筆巻之六目録

吹上白菊
天狗魚
元寶草
亀甲石
白蟶
丁香花
獵子鳥
南海包譜

附録二

山歴
金荆　以下十種山中信古考
石栗
錢石
知羞草
續斷藤

西園寺藏書

四季蘭
雪蘭
金口蜆
鹿角芝屬
暴々雑
豹
僕奈
竹葉蘭
梛螺
紫荷花草 以下五種補遺
山僧
有足蛇
四足雑

桃洞遺筆巻之六

紀伊　小原八三郎源良直　録

吹上白菊

八雲御抄 巻三上 ふき上の白菊 と萬葉集に不詠歟、寛平菊合以後、殊に名物とはなれり、寛平菊合右歌に「古へら我が萬代まで咲くべきかなまひしらぬ菊なり」と見えたり、今に至りて猶菊を玩ぶこと益甚し、中古も本州海部郡吹上の白菊八古歌

ふも多く詠じて世人これを賞翫ス花戸(ウエキヤ)まて今吹上の白菊と呼ふもの多し二種あり一を洋菊(オホギク)御製詩集の中ふ花色白きものなり一ハ俗ニ小紋菊(ハタカヤ)ト呼ふ濱風サウと似て長く半ばり上に粗き鋸齒あり九月の末莖の梢に單瓣白花聚り開く大さ一寸餘形染家に用ふる菊小紋ふ似たり故に名付く漢名いまだ考へず按ずるふ此二種眞の吹上の白菊にあらず故老の傳に寶永年間に冷泉家より吹上の白菊と求めらるゝふ

有德大君　命じて只海畔及原野に多く産ス龍腦菊をもて進せらる冷泉家の説に菅家の詠をもて考ふるふ此ぞ吹上の真種なるべしと甚感賞せ〳〵しとゝ云へり此龍腦菊を今も海部(アマ)名(ナガ)州兩郡の近海山野に多く産ス九月花を開く單瓣小花あり其瓣白色其心深黃色なり清香殆龍腦に類ス又葉を揉て嗅ふ亦龍腦の香あり故に龍腦菊といふ世和漢通稱ふ〳〵羣芳譜花部三菊の條白色ニ部に龍腦菊一名小銀臺出京師開ニ以九月末類ニ金萬鈴而葉尖花色類ス人

間紫鬱金而外葉純白香氣芬烈甚似龍脳是香與色俱可貴也といへり（按るに龍脳菊いとと范成大が菊譜に出り此文を菊譜の畧文なり花色類人間紫鬱金の八字を花上葉色類人間深鬱金の十字に作れり花心の深黄色なるをいふ歟）

直按るに龍脳菊をもて吹上の白菊に充つるを穿鑿に過ぎる説歟古今和歌集（巻五秋下）菅原が朝臣の歌を載せていはく寛平御時せちゑの菊合ふ洲濱を作りて菊の花うゑうゑるふといへるありける歌吹上がもとはのかくふ菊植ゑうゑるをよめり「秋のせの吹上ふきてる白菊を花ぞあらぬ」

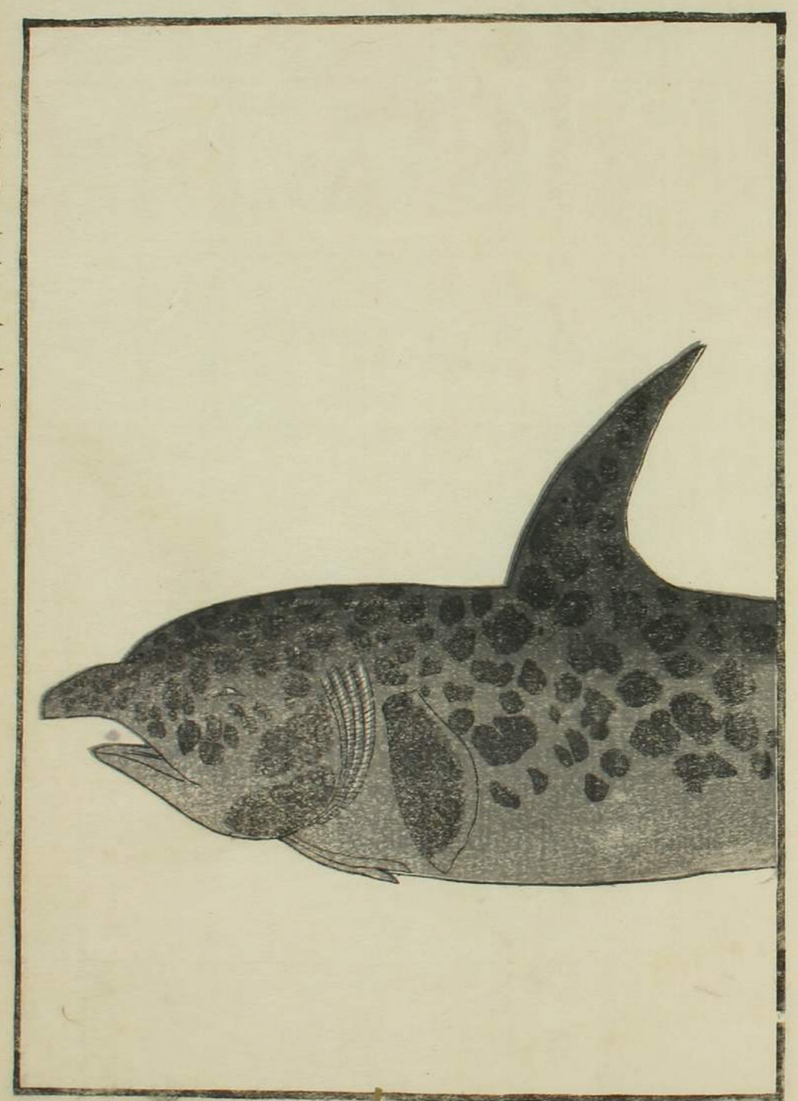
浪のちするゝ（素性法師家集に題しらずとありて「秋風の吹上のもとはの白菊を浪ぞ立ちすると載せゝり菅公の詠にちく似ゝゝこの歌の事なり）

菊合（群書類從巻二百二十六）に左右各十番の歌あり左方占手の菊花殿上童に立君を女に仕ふりて花ぶねをもてかさせてもたせゝり（はゝ九本をは洲濱を作りくそまゝ）其洲ゝ丁に名を法けつゝ菊に結ひ法ゝまゝり右方ふ花も殿上童ちゝ藤原重時あゝ丁守ゆゝ法けゝむをこゝゝみてきくゝもおすゝ洲濱をいとおかさ

を作りて、ひとりうゑ植ゑれたるを出るかぎりなく
せうれたること云とあり、題を紀伊國吹上濱菊と記せり
久夫木和歌抄巻十九十九首菊の歌の中に、従三位
為實卿の歌「花の色に、菊ぞえなのり、白妙の、いさこ
吹上の濱乃志ほ風」此外吹上白菊の古歌數多あり、紀伊續風土記巻八十九物産の二
に詳載せられ、茲に贅せず、右等の古歌に據るに、吹上の白菊を
異なる種にて色形、常品の白菊をいふ歟

天狗魚

本州熊野海中處々に産ず、一名天狗ブカ、又天狗サメ
といふ、漢名いまだ考へず、大なる物は長さ三尋許、周
圍五六尺、頭は河豚の如く、上唇鼻長く出る、目至りて
細長し、總身淡黑色にして深黑斑点あり、皮膚に
細小の沙あり、脊に立鰭あり、又腰にありて脊にあり、微
に小形なり、尾は兩岐ふかく、上の方長く、下の方短し、往
年此魚を捕る事を禁ぜ若これを捕ふ、海神祟を為
すといひて甚恐る、安永年間、那智莊勝浦村饑饉にて
止事をえず土人捕へ食ふ、其味佳なれば、毒いかし
直云、此魚今ふてい熊野浦々にて捕ふ、性至りて魯



天狗魚

鈍まして人を恐れず漁人初猟を刺入るゝ出れを
知らざる漸々其痛を知り海底り沈む其時猟の繩
を弛ふれば痛堪の糸海底ふて顛倒して後よい
其繩を身ゟ纏ひ死して終ふ海上ゟ浮み出り此を
捕へて油を採ること鯨ゟ同し又其肉を糕(カマボコ)となし
伊勢ゟ山中へ售る大ゟ賤民の用り利ゟり又此頭
骨をもくちらして天狗の髑髏なりといひて寺
院の什物とし兒女輩を欺くもの是ゟ又海豚(イルカ)の頭
骨ふても欺く平賀源内の風來六部集巻下ふ天狗髑

髏圖と出せるゟ海豚(イルカ)の頭骨を画るなり又伊勢
ゟ天狗魚と呼ふ小魚ゟり形ノボリサシといふ
魚ゟ似て大さ三四寸口鼻曲る故ゟ名づく背ゟ長
鰭ゟ生て張ゟきゟ翅の如し本州日高郡ゟ稀ゟ産
ゟ方言ハタガシといふ

元寶草(ホトケノザ)

佛ノ座ハ原野ゟ多き草なり臘月ゟり苗を生ず莖の
高さ一尺餘葉の形積雪草(カキトホシノハ)葉ゟ如く脚葉(モトバ)ゟい莖ゟり
節ゟ附くる葉ゟは莖ゟく其節々ゟ旋り附くる形恰

を蓮座の如し。故に名付く。鼎數層を起せり正月の末
より葉上毎に小紫花聚り開く。愛ひべし。一名佛ノッ
ヒ（用藥須知後編正誤）といふ氣味微に辛苦涼ふして毒形し。
野人採りて蔬と形し食ふ蘭山翁の耋筵小牘に本艸
從新（巻一下）濕草類に載せらる元寶草に充りその文に
元寶草辛寒補陰治吐血衄血生江浙田塍間一莖直上
葉對節生如元寶向上或三四層或五六層と見えたり
直云元寶は唐山みな今通用の銀なり寶曆年間に
清商齎し來りたへる物をうるに象紙門の鐶
鈕の如く其重さ五十錢或は百錢なり。佛ノ座の葉
形莖に旋り付きたるの形。此元寶銀に似たるを
もて名つくる形。元寶のことは清の吳中孚の
商賈便覽（巻五）の辨銀要譜の中に詳なり
○古らう佛ノ座は諸說なり。或は車前草（オホバコ）とし。或は芋（ヂガヂガイモ）
魁とし。或は紫雲英とし。或は蓮藕（ハスノネ）とし。皆誤なり。又和
爾雅（巻七）に臭蒿（ハマニンジン）の字を佛ノ座と訓し。巻懷食鏡（菜類）に雞
腸草（ハコベ）を一物とし。松岡氏の救荒本草（巻上）の風輪菜に充て
或說に本草綱目（巻二十七）の生瓜菜に充り。此等も亦誤

直云名物攷古小識巻二に草烏醫圖有佛座之名喜蘭草詳其圖今之金瘡小草而著條自別也此書不詳時世非近古之物蓋古名尋ねぐべし此書尋ぐべし

那ヲ。風輪菜ハ俗稱クルマバナト
いふ。生刈菜ハ和産詳ならず。
直云佛ノ座ヲ人日七種菜の一ホシて。公事根源卷上ホ
薺・ほとけのざ・芹・菁・御形・ほとけのざ・佛の座ヲ出ケるも
是那ノ。拾芥抄。卷下河海抄。卷十三 壒嚢抄。卷一 本朝編年録。
卷三十一歌林雜木抄。春上歳時語苑卷乾 等ヨも。公事根源の
説ホらるヲ。又日本書紀通證。卷十二 七種菜一説の歌
を引きて。佛ノ座ヲ耳菜クサ漢名卷耳ヲ換さり。古ヲ
ハ正月七日。神道家ハ供具ホ。佛の字ハるをもて避
たる那ヲべし。七種菜の事ヲ。予曩ヲ。春七種考二卷

を著して。詳ホ辨ヲヲハ茲ハ略ス。

龜甲石

文化九年壬申の春。予ガ友阿波の峒山小原氏ヲ。龜甲
石一个を惠まる。其國勝浦郡福川村の産なりヲハ
ふ。長さ二寸半許。幅一寸八分許。石質至りて堅く青黑
色ホして。頭尾四脚共ヨなし。表ヨ龜甲紋ハりて真ヨ
逼ヨり。裏ヨハ紋那し。ホ況明の曹明仲ガ格古要論卷七
ヨ。龜紋石を出して。嘗テ見石龜鎖子一箇如酒盞大遍身
天生自然龜紋。甚可愛とハふ是那ヲ

直云。雲根志三編卷四ハ。丹後中郡溝川村ハ。龜紋石を産ス。ハヘり。又同卷伊賀阿部郡佐野具村の山中ハ産する龜甲石ハ。其形五角六角ヨ〳〵。ハ口より切ラ形ガ如シ。大さハ豆粒。或ハ大豆粒ヨ過ズトいふハ。今龜甲砂と呼ふを称なり。又前編卷三ヨ。龜化石と出ズもの。ハ。本草綱目卷十ヨ載る。石蟹石鼈の屬なり。形質皆本書ハ詳ス。又紀伊土産考別録卷二ヨ。龜甲石ハ。熊野ニ産ス。大サ七寸許。上下ノ甲アリテ。首尾四足ナシ。甲紋鮮カナリ。又熊野堤谷ノ大石ニ。大サ尺許ノ龜甲ノモノアリ。又日高サヽヤキノ橋邊ニモアリト云フ」と載せらる此三種ハ。予いまだ目擊せズ

白蠅

寛政二年庚戌の夏。浪華天神の社家某者。五百介圖并辨各三卷を作りて。我　吹上の[redacted]ヨ獻る。其書。蚌蛤を混雜し。或ハ一物ハ〳〵ヨ數名のその重出し。或ハ偶變生し。或ハ瑣碎の介。形ハまゞ備ラざる物等をもて。強て名を異ハし。或ハ海石類を混し。其數ハ

充川杜撰最甚し。第一巻蚌類に雪ノ朝といふ介あり。其圖及ひ辨を按するに。本邦西南海に産し。形蟶に稍短く兩頭圓し。殼ハ薄く潔白ふして銀光あり。玉りて麗し。蟶の殼波濤にさらされて白色になれるをもちハ別物なり。肉の味蟶に優まる。臺灣府志巻十八白蟶を載せて臺原無蟶。康熙五十九年。始有生于海泊泥塗中。形與肉地蟶無異。但殼差薄。色白如玉。肉尤清甘。四五月時有之といふ。是物なるべし。

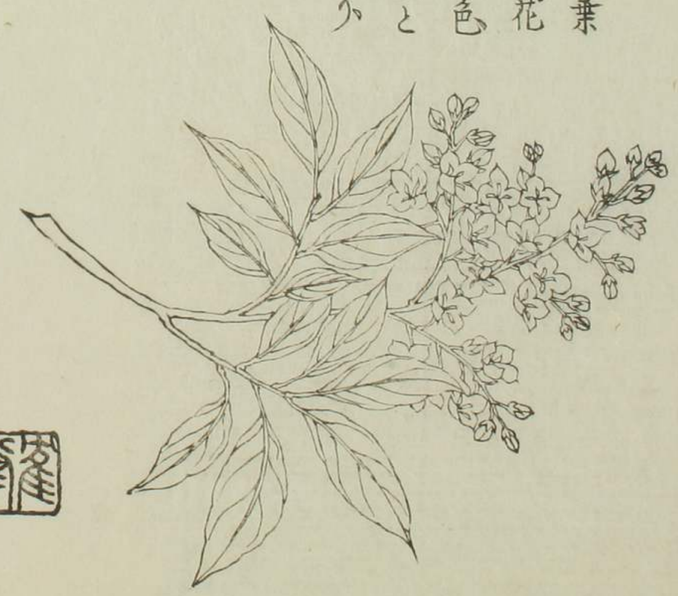
直云。近年本州海部郡荒濱の海中より。一種の白蟶出川。形狀本條に長く幅狹し。其色潔白ふして銀光あるハ本條に同し。玩介家ハ名つけて。白刃介といふ。刃介ハ別なり。

丁香花

花卉百種（此書の事ハ巻の一ふ。丁香花の圖あり。今茲翠梅の下に載あり）に摸寫し。和産ハ詳ならず。秘傳花鏡巻三ふ。丁香。一名百結。葉似茉莉。花有紫白二種。初春開花。細小似丁香。蓓蕾而生。於枝杪。其辨桑色紫。清香襲人。接分俱可但畏濕而不宜大肥といふ。是なり。又重訂遵生八牋巻十六花

丁香花圖 花卉百種

設色を考ふるに、枝葉緑色、穗の莖淡紫色、花も四辨ゐ〳〵て粉紫色、辨内の四路白色、蕚と花蒂とゝ深紫色なり



史左編卷四並ひゐ紫丁香花を載せて、木木花如細小丁香、而辨柔色紫、萼蕾而生、接種俱可自是一種、非瑞香之別名也遵生八牋同卷瑞香花の下に有紫花とゝいへるも名紫丁香とゝいふゝ同名異物なり

同物ゐ〳〵て、藥中の丁香とも別種なるべし

直云、景苑詳註卷三十に、百結花、即丁香也、張景脩十二客圖取之爲素客と見え、事物異名錄卷三十三に、西溪叢語丁香爲情客とも見えたり、又清の沈賦が名花譜清課七種中第四種重訂增補致富全書卷四等に、紫丁香を載せて、其下に、唐御史基日、含此花芳香竟體、偶一奏對

三餘贅筆云張敏叔名景脩宋礼部郎中、吳中人、

如聞異香とへるは藥中の丁香を混〳〵謬る歟。

獵子鳥（アトリ）

萬葉集第二の阿等利（アトリ）を、日本書紀卷二十八　天武帝白鳳七年十二月癸巳朔乙卯、臘子鳥弊天自西南飛東北、同九年十一月、臘子鳥弊天自東南飛以度西北、とへふ是歟。和名類聚鈔卷十八辨色立成云、臘觜鳥註阿止里、一云、胡雀、又楊氏漢語抄云、鴾子鳥註和名上同。今按、兩說所出未詳、但本朝國史用鴾子鳥、又或說云、此鳥群飛如列卒之滿山林、故名鴾子鳥也と見え、又新撰字鏡鳥部六十三に獵子鳥、又云臘觜鳥阿止利とも見えたり。

通證卷三十四云、蝉當作蔽、史秦始皇紀曰蝗蟲從東方來蔽、

直云、又書紀卷十九　欽明帝二年三月の條に臘鳥と書く、下弦釋紀の文によれば、觜の字脫せる歟ならむ。傍註あるに臘雀鳥に作り、舊事紀卷九に臘嘴鳥に作る、古事記卷下に足取に作る、又異本の釋日本紀卷十五に廿八卷臘子鳥、私記曰、愚按十九卷爲臘觜鳥、今此改觜爲子、可考求、とへり、按するに、和名鈔の註に本朝國史用鴾子鳥、とのまと、今の本は、本文を引る如く、臘子鳥に作る、同註の又或說云云の

文字をもて。獵子鳥の字を用ふるを是とすべし。獵
音葛。獸名。獵音鼠。田獵之獵。二字音義別なり。又獵ハ
鼠の音なれども。我姓なり。俗作田獵字非と廣韻入聲卷五
に辨せり。又鵰背鳥の鵰を字鏡ハ臘に作れり。玉篇
卷二十ハ鵰臘俗とあるとて同字なり。恐らくハ蝎まと
蠟上俗下正の誤なるべし。元來蠟背ハ桑鳶の一名なり
て。鄭樵が爾雅註卷下に出り。既に鄭樵が通志卷七十六ハ
蠟背を誤て。鵰背に作れり。辨色立成ハ今原本世
に伝しる所なれども考へがたしといへど桑鳶ハ背巨大

小にして蠟色なり。阿止利の背も。亦巨大白色ハして。
白蠟色のもなれども。此頃桑鳶ハ豆マハシなる
ことをもらしてと安りハ阿止利を桑鳶ハ充てなり
るべし。道春の多識編卷四にも。謬て桑鳶和名阿豆土
利と出せり。又胡雀をいまだ考へず。本朝食鑑卷六禽
類華和異同の部ハ。胡雀の説ハまだ審らざ
れども茲に贅せず。又伊呂波字類抄卷八ハ。鶩の字をア
トリと訓せり。是亦誤なり。續字彙補集ハ按。説文。鶩與
鶩同。牟母也。人諸切。是鶩爲鶩之本字。今字書。皆作農

都反。失其原矣とへり』又難字記卷ホ鴈の字をアトリと訓ひ此字考ふべからず』

阿止利は。秋月多く來り。春ホ至ればホの去る。形雀ちり大ほして。背角巨く圓く白し。頭頸灰青ホして淡赤點あり。頷黄ほ赤く。背青黑ホして赤を帶び黑斑あり。胸腹赤黑く。腹下黄白ホ。翅尾ともホ黑く。脚ハ黄形ち。肉の味苦くして食ふべからず。喚子鳥卷ホ下アツ鳥ハ見事なる鳥なり。手を重和ていふ〳〵見事形彩鳥なり。然るとも。囀り無く。多き鳥みて飼鳥の下品なり』と

ハへり。此鳥好むで幾百も群を形して飛ぶもなり。

直云。續日本後紀卷十七ホ。　仁明帝。承和十四年三月戊寅。羣鳥億萬。繞日上下。自日中到黄昏。仰看空中。不知何鳥とハひ。又是月數々有羣鳥。遲明自西方度東方。其夕覆天。終始不見。訪諸故老一本脱老字皆云。未曾聞之者とハふも。阿止里の遲く去るもなるべし。

又常陸國誌卷四ホ。古老相傳。東南海中有島。無知其大小遠近者。鶺鴒燕臘子鳥等常來。自此島。其來必乘東南風來。其去必乘西北風去とハへり。

松岡玄達の本草一家言（巻八）に花雞に充つ。其文に云。花雞和名鵲子鳥（アツトリ）。其形大如雀。其色多赤黄黒白斑點。此鳥數十為群來。壓于樓樹或城壁而死。故俗語人以進退躁卒失度謂如花雞投火是也。通州志云。花雞（投此下事物紺珠有似小雌雞四字）秋日來自海東外。大者名麻雞と。蘭山翁も此說に從へり。

直按するに。山堂肆考補遺（巻四十五）に云。花雞小鳥也。八九月間來自海外。投入樹林。驟如風雨聲。毛羽青黄色。亦有黒色者。腹下淺白色。土人謂之花雞と。此文によるに阿止利に充つるも可なる歟。

南海包譜

文政紀元戊寅の冬十一月門生等本州に產する處の柑橘の類を集めて觀覽に備ふ。村瀨敬之南海包譜三卷を作る。其題辭の第一則に云。橘柑之類盛於南方。昔人業已稱之也。在我日本。本州實居其南矣。今茲之冬。與諸君相俱搜索採摘。而集之板坂上齊之堂。請桃洞先生正其名。無慮五十有餘種。於本州之產蓋盡焉。予恐其用力之勉。徒空其功。於是觀其形。察其色。嗅其臭。嘗其味。

而後乃記之名曰南海包譜然地有膏壤養有精粗且夫熟有早晚而一時摘之則其形色臭味不能無變移故先直記今日之所試而後厠以所素識傳聞則庶幾乎無大過矣又第六則云斯舉搜索日淺不過求之四五里之外猶且園林之間不可家訊戶尋況其佗矣且夫人力有涯造化無窮他日有遺漏者嗣出則須續而録焉云今茲亦其目之左以抄出云

上卷○柑開寶本草和名加牟之醫心方阿萬豆美大同類聚方今名蜜柑下學集○乳柑橘録一名真柑同上御柑甌江逸志俗稱在田蜜柑又紀國蜜柑○無核柑橘録俗稱核無蜜柑○朱柑橘録一名支柑汝南圃史猪肝同上俗稱紅蜜柑○木柑橘録一名乾柑汝南圃史俗稱量蜜柑○饅頭柑挂海果志俗稱朝鮮蜜柑又德利蜜柑○金柑橘録一名金橘歸田山橘本草綱目俗稱亦云金柑和漢通名也○牛奶柑秘傳花鏡一名牛奶金柑汝南圃史金枣花曆百詠俗稱長金柑又枣金柑又唐金柑熊野尾鷲浦○山金柑本草綱目一名山金橘同上金豆同上羊矢橘閩書南產志俗稱豆金柑又粒金柑○生枝柑橘録俗稱唐柚○海紅柑橘録俗稱咬留吧蜜柑○獅頭柑天中記引雲南志俗稱唐九年甫在田其島○佛同名不一

獅頭柑

彰邦喜写

形大而匾圍一尺高不及二寸外有瘢瘰形粗類獅頭冬半外尚綠而內已紅熟香味似香橙而更美皮亦可食愈久愈美按天中記卷五十二淵鑑類函卷四百並引雲南志曰雲南北勝州有獅頭柑狀如獅頭而色黃有大如椀者其味最甘即是也

手柑本草綱目一名佛指香櫞八閩通志佛爪香圓同上佛手香櫞閩書佛手櫞高州府志佛指櫞南寧府志俗稱亦云佛手柑○枸櫞齊民要術一名香櫞本草圖經鉤緣子南方草木狀香圓橘錄香圓橘瘍科準繩俗稱圓佛手柑○男蜜柑漢名未考○八代蜜柑此種本出肥後八代

蓋亦乳柑也較在田產唯皮理少密耳味頗美○柚（カウ）柑（大和本草）漢名未考○交趾蜜柑疑是臺灣府志所載番柑（直云此說非）

中卷○橘（本草圖經）和名太知波奈（和名鈔）俗稱加宇之○黃橘（橘錄）俗稱白輪柑子又白柑子○早黃橘（橘錄）一名早紅橘（汝南圃史）俗稱早柑子又金柑子（尾鷲浦）○凍橘（橘錄）俗稱晩柑子○穿心橘（本草綱目）一名軟條穿橘（橘錄）女兒橘（同上）穿橘（離騷草木疏）區橘（汝南圃史）俗稱大平柑子○沙橘（橘錄）一名塗橘（並夷花木續考）俗稱闕○饅頭橘（本無此名用饅頭柑之例假名）○朱橘（本草綱目）一名滌血（汝南圃史）鱔血塘南（同上）俗稱紅柑子又赤柑子○木柑子　朱橘一種漢名未考○盧橘（上林賦）一名櫨橘（天中記）壺橘（輟耕錄）夏橘（本草綱目引廣州記）給客橙（魏王花木志）俗稱夏蜜柑又春蜜柑（本州在田）又雲州橘（同上）○包橘（橘錄）今春盤所備之柑子○荔枝橘（橘錄）俗稱痂柑子○猴橘（八閩通志）一名橘花（閩書）和名多知波奈（大鏡）多知字（俗）○拘橘（本草綱目）一名臭橘（同上）和名加良多知（本草和名）加良立花（新撰字鏡）○唐蜜柑一名高麗橘（尾鷲浦）漢名未考王世懋果疏朱橘有一種紅而大者恐是也○李夫人橘一名雲州蜜柑（本州湯浅）實不惠蜜柑（同上）金九年母（近年名）漢名未考○溫州橘（大和本草）同上○宇樹橘（本朝食鑑）同上

下卷○香橙（群芳譜）一名金橙（廣羣芳譜）橙子（橘錄）和名阿倍多知波奈（本草和名）俗稱九年母○回青橙（八閩通志）俗稱代々○臭橙（秘傳花鏡）一名蠟橙（同上）和名加布知（本草和名）俗稱加布須○水橙（廣東新語）俗稱長九年甫○柚（爾雅）一名香柑（八閩通志）和名由（和名鈔）○雷柚（齊民要術）一名鐳柚（廣東新語）俗稱咬嚕吧柚○邏柚（廣東新語）俗稱花柚○饅頭柚（此亦用饅頭柵之例假名）俗稱巾着柚○朝鮮柚漢名未考本草圖經所謂襄唐間柚色青黃而實小者恐是也○大福（大和本草）一名大福柚漢名未考○朱欒（橘錄）一名櫨（爾雅）椵（同上）臭柚（桂海果志）和名柚柑（和名鈔○奥上卷柚柑同名）俗稱左無須又赤座几無○香欒（橘錄）俗稱座字無又坐無字（九州）坐無字字（伊豫）○文旦（質問本草附錄）一名文彈（花曆百詠）文蛋（廣羣芳譜）京橘（清俗）俗稱唐九年甫（九州○同名不一）紫（在田）○蜜筩（本草從新）俗稱小座無字○蜜樟（華夷花木續考）一名蜜覃（離騷草木疏）俗稱琉球九年甫又阿蘭陀九年甫○宜母子（廣東新語）一名黎朦子（桂海果志）黎檬子（廣東新語）宜檬子（同上）里木子（同上）藥果（同上）宜母果（嶺南雜記）宜濛子俗稱里萬年（大和本草）須陀知（熊野）○黃淡子（廣東新語）俗稱唐枳殼○枳實（本草綱目）和漢通名

直云。以上は外南海包譜の後ゆ本州へ出るもの。

緑橘（橘録）俗稱青蜜柑○福橘（汝南圃史）一名貢橘（同上）俗稱漢蜜柑（湯岌）福州蜜柑○無核橘（華夷花木續考）俗稱核無柑子○小衢橘（汝南圃史）一名黄塘南（同上）俗稱鈴生○匾柑　俗稱大平蜜柑（尾鷲）○琉球橘（尾鷲）漢名未考○菊蜜柑　同上○無核香橙等ハ。詳ニ予ノ南海包譜補遺ニ辨セリ。

此餘暖地ノ諸州ヲ探索セバ猶多ク得ベシ。

桃洞遺筆卷之六終

附録二

小原良直　著

山靛

萬葉集（卷九）長歌の中ニ。紅赤裳（アカモスソヒキ）數十引山藍（ヤマアヰ）用摺（モテスリ）衣服（キテ）而。云云

延喜式（卷十四）縫殿寮（ヌヒトノ）の中ニ云。新嘗祭。小齋（ヲミ）諸司青摺布衫（中略）山藍五十四圍半。延喜儀式（卷三）踐祚大嘗會儀の中ニ云。青摺袍各一領。注ニ其表以山藍摺之裏淺緑。拾遺集（卷四冬部）伊勢ノ歌ニ。山ゐるゆ雪のふりかくとて侍りけるを見たまへりて。「足引ノ」。山あゐニ重る

白雪も。さらぬる衣のぬ〳〵ちてそされ。 又 巻九 雑下 東宮女
藏人左近が歌ゑ。祭ゑ使ゑ淵のり出る人のもとゝ
り。さるまこの淵さるまゝ。ゑ法のえ〳〵ゑ利ゑるを。おそ〳〵と
野ゑ待りゝゑ法は。「かゝり形く。ゆ〳〵くゝとゝ絶と。足曳ゑ。
山井乃水ゑ。狩そゑ和ゑるゝと詠めるゑ。山井ゑ山藍を
あけゝゑるなり。 雅亮装束抄。巻二 舞人装束の事云云 の
條ゑ云。青摺ゑ。かりきゑ衣ゑり長ゑゑ。山吹ゑ井とゝふ
ゑ〳〵て。竹桐ゑ鳳凰をすゑゑり。 和訓栞前編 巻三十四
ゑ云。やまあるゝ。山藍と書り。自然ゑ山ゑ生ゑる一種の

藍なり。大嘗會の齋服ゑ用ひさせらるゝゑの是形
り。藍ゑ似て葉ゑ細文ゑり。今賀茂ゑ多し。又紀州
ゑりも出せり。本草原始の透骨草なりゝとゝいへり。 按ゑる
ゑ。山藍ゑ。本州各郡皆ゑり。好ゑて山足陰地森林中ゑ
多く産ゑ。陽地ゑゝ絶えて形し。莖方ゑ〳〵て高ゑ二尺
餘。葉の形賽蘭(チヤラン)葉ゑ似て薄く柔ゑゑ淡緑色。背微ゑ
淡し。鋸齒及ひ皺紋あり。兩々相對し生ゑ。梅雨中ゑ挿て
活し易し。此生葉を搗き繰りて緑汁を出ゑ。物を染
めて青色を形ゑ。十月ゑ至り。梢ゑ細莖を抽きて。淺緑

色ある小花を開く。三瓣みしてゝ蕊を亦同色なり。花落ちて小青實を結ぶ。大さ山椒粒ゝ如く。熟しゝ猶青し。生根ハ藍色。葉も乾そうて亦藍色を形ぶ。物理小識巻九ニ山靛染易上青葉似賽蘭。三月挿條種之といふとも即是なり。透骨草ニ充つるハ誤なり。透骨草ニ三種ありて本草原始巻一ニ載る物ゝ本草綱目巻二十一雜草類のもとと同うして和産詳ならぬ。又救荒本草巻上の透骨草ハ益母草なり。又汝南圃史巻十ニ鳳仙花俗名透骨草といへり。皆山藍ニ充つべきものみならぬ。

山中信古考十種

○金荆　レコガキ　リウモク

太平御覽巻九百五十九ニ杜寶が大業拾遺錄ニ引きて云、五年南方置北景林邑海陰三郡。北景在林邑南大海中。與海陰接境。其地東西一千餘里。南北三百餘里。海中四絶。北去大岸三百餘里。或云馬援鑄柱尚存。地暑熱。多大森木。高者數百尋。有金荆。生於高山峻阜。大者十圍。盤屈瘤蹙。文如美錦。色豔。於真金中夏時有於海際得之。千人數用。甚精妙。貴於沈檀。云云。後本州日高郡山地の並龍神

奥ゐ産ゆる方言龍木と呼ふ物ゐ〳〵そ。弓人紫金カキと
ゆゑ。奇重そる物是なり。

直云。紫金材ハ。三編八の巻。黄櫨の條ゐ詳ゐ

○石栗　アハズナ

雲根志後編巻ゐ。丹後の國。乙濱の栗砂そ。形真の栗粒
ゆ如し。色黄赤ゆ〳〵ゆ〳〵。天中記巻八ゐ。郡志を引きて。黔中郡
南石崖屹立。傍有石洞數丈。相傳。諸葛亮征九溪蠻嘗過
此留宿。洞中設一床懸栗十握以秣馬後遂化為石床石
栗至今猶存と云へる。石栗ゆ〳〵〳〵。

○錢石　セニイン

又雲根志後編同巻ゐ。錢石そ。美濃赤坂山。及び山城鞍馬
僧正谷なり。貴船へ下る道ゐ有る事そ云へり。太平寰
宇記。巻百五十九韶州曲江縣の下ゐ。湘州記を引きて。曲江
縣東。有錢石山。其狀四方有若臺其石三面壁立。上有
碎石如錢。故謂之錢石山〳〵〳〵。同物ゆ〳〵〳〵。

○知羞草

廣東新語巻二十七ゐ云。知羞草。葉似豆瓣相向人以口吹之
其葉自合名知羞草。そ。即臺灣府志巻八十の含羞草

と同物ゝ〜。天保辛丑の歳。荷蘭人初て儀來る處の。
コロイジールルメイニート是なり。今俗間ゝ。子ム
リグサ。或ハオジキサウなど〜名付け弄ぶ。百品考二
編上巻ゝ。圖を出し〜此草の事を詳ならしむ。茲ゝ略ス。
博物志三巻ゝ載る。堯時の屈佚草。一名指佞草を併せ
て一ト〜。恐らくハ偏ゝ渉まり

○續斷藤　レラクチ　猕猴桃と同名

太平寰宇記。巻百五十七　廣州信安縣の下ゝ云。續斷藤。山行
渴則斷取汁飲之。號曰東風菜。と　即本草綱目八巻十の含

水藤と同物ちり。一名涼口藤廣東新語　諾藤。齊民要術　水藤同上　と
いふ。熊野山中のシラクチガツラゝ充つ〜し〜。
直云奥熊野北山郷の深山絶壁。或ハ喬木上ゝ延蔓
ス。莖蔓巨く扶芳藤莖ゝ似て。大ハ周圍五六寸
ゝも及ぶ。蔓至りて長く〜て強し。葉ハ搭ゝして長
さ二寸許。細鋸齒ゝ互生ス。花實ハ冬ゝ〜。
其莖を斷ゝて。清汁流を出ス。味微ゝ甘し。重修本草啓
蒙巻十五ゝ載る。阿波雲早山の物を。此シラクチカツ
ラ〜〜

○四季蘭　ギヨクシンラン

今花戸小玉真蘭と稱するものなり。又唐寒蘭ともいふ。葉も建蘭に似て幅廣く。且長大ふして稍厚く光澤あり。四五月より九月の頃まで。再度花を着く。花も形亦建蘭の花に似たり。淡黄白色にして微に青色を帯び。透徹し。小紅紋あり。又暖ある年には。冬月も亦花あり。根も鳳蘭の如し。按ずるに。致富全書九卷に。四季蘭。葉長勁蒼翠。幹青微紫。花白質而紫紋。自四月至九月相継繁盛。聞諸閩人曰。此種在彼處隆冬亦有花。要不甚貴。蓋其所長。獨勤於花耳。秘傳花鏡五卷に。四季蘭。葉長勁蒼翠。幹青微紫。花白質紫紋。自夏至秋相継而發。冬亦偶開。但不如夏蘭盛。云々。即玉真蘭なり

信古再按ずるに。廣東新語十七卷に。黄蘭。葉長而稍大。花淡黄有小紅紋。といへるも亦玉真蘭の屬なるか

○竹葉蘭　同名多し　ハクラン

又花戸小ハクランと稱するものは草木錦囊集六卷に博蘭と書く。葉久蘭と書く。形狀圖の如く葉の幅濶く下長く一尺許光澤あり。春月叢幹を抽て四五花下に

マ開き上ハ至る。亦紫色ハして黄蕊ハる。草木性譜地巻ハ
通雅巻四の冬蘭ハ充つ。先近きもの形ハり。按ずるハ。
廣東新語巻十七ハ。竹葉蘭葉似竹。似萱。花則蘭也。深紫叢
生有微香とい へる。全く博蘭形ハ。小野蘭山々拮梗
蘭ハ充ひもと。花則蘭也とハふる合ずべ。拮梗蘭々質
問本草外編巻二ハ碟々草と見えり

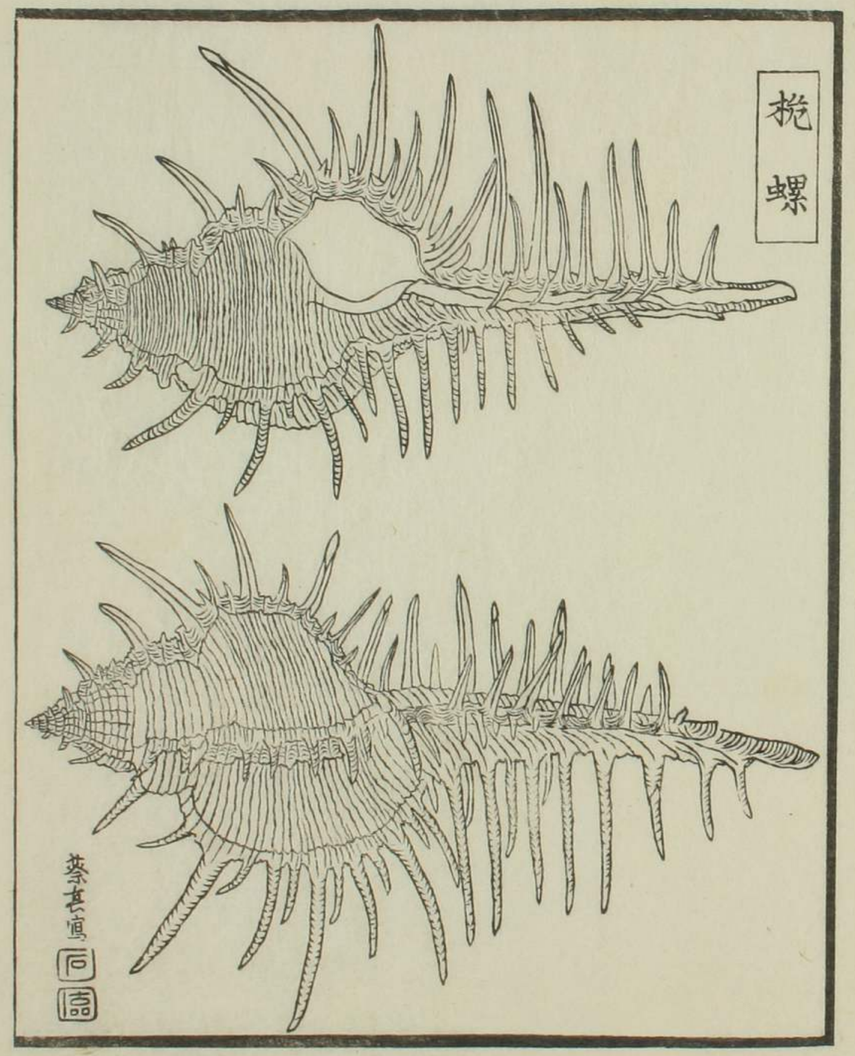
雪蘭　カンラン

清の冒巣民ガ蘭言昭代叢書甲集巻々四十九ハ。雞足山志を引きて
雞足産蘭。有紫。有朱。有蜜色碧玉色。而以雪蘭為第一

閑于深冬其色如雪。鮮潔可憐なり。去徳寒蘭形。

梛螺　ハリニシ

小野蘭山の説に。中山傳信録六巻の。梛螺殼尖出如梛。生刺満之名梛魚とゝなくるを引きて。流螺に充つるハ誤なり。流螺を壁甫魚の属にして。別に漢名未考とす。梛螺の生刺満之の文に合たり。按するに。貝盡浦之錦上巻に。惡鬼貝。一名百鬼貝又瀝貝（ナガシカヒ）とゝなる貝なり。形辛螺に似て灰白色。唇長く上に出て。梛と立るの形なり。周圍に巨刺大小四十餘本を生ず。故に五百介圖巻中に。刺辛（ハリニ）



螺。一名骨貝上同ノ如クニシテ。又若松貝和奇浦ニモ多クアリ。之ニ即
捲螺ノ形ニ似タリ。

○金口蜆　ヘリトリシヾミ

蜆ノ數品アリ。淡水ノ産ハ。殼黑色。溪澗ノ産ハ殼青黑
色ノ形ナリ。又鹹淡相交ル處。及ビ海中ノ産ハ。殼黃色ノ形
俗ノ黃シヾミニ似タリ。百一選方二卷翻胃大効散方中ノ。
黃蜆殼ヲ用ヰ。即三才圖會鱗介類六ノ。黃蜆殼黃出潮泥中。
四月甚肥ユ。是ナリ。又本州吹上ノ沙海中ニ。一種
ノ黃蜆アリ。形大ニシテ殼黃黑色。兩唇一道深黃色。味

甚美ナリ。俗ニヘリトリシヾミ。廣東新語十三卷二ノ
黃蜆而金錢蜆者。生太海中。獨珍。劉鋹時。取以自奉禁民
不得採。亦曰金口蜆。即是ナリ。直按ニ南寧府志卷三ノ也
文ハ。金錢蜆ヲ。金錢口ニ作ル。本草啓蒙
卷四十二ノ。只蜆ノ一名ニ入レタリ。誤ナリ。

初編補遺五條

○紫荷花草

卷ノ一ニ載ル。紫雲英ヲ。ナリ紫荷花草ト云フ。清ノ
高士奇ノ清吟堂集七卷ニ紫荷花草遍青郊。繡錯川原夏始
交。莫向漢宮求首蓿。移栽上苑秣蒲梢。註汗南菜花黃

後。有紫荷花草。遍地開紫花。農人取雜河泥溉田。馬食之易肥。蒲梢馬名。漢武帝伐大苑所得千里馬。見えたり

又信古の説ふ。欽定盤山志（巻十五）ふ敷地錦。俗名飯花。高サ又許。叢生花紅紫色。味甘可食。四月中盛開。徧地如錦。といひ。また臺灣府志（巻十八）物産草部ゑ。遍地錦を出し。その形狀とんさぐれ。俱ゑ紫雲英と同物ぬらべし。

○鹿角芝屬

元史（巻五十一）五行志ニふ。至元〻年十二月。芝艸生於荊門州當陽縣覆船山。一本五幹。高サ尺有二寸。一本二幹。高五寸有半。皆兩岐二本相依附。扶疎瑰奇。如珊瑚枝。其高者結為華蓋慶雲之形。といふその。第一巻ゑ載せる。鹿角芝の屬ならむ。

○山僧

清の唐陶山ゞ岱覽（巻一）ふ。明の蘇志乾ゞ岱山賦を引きて。翡翠布穀。巧婦山僧と連称出し。又（同巻）清の周藩ゞ泰山賦を引きて。巧婦韻清而棲廬。山僧讀佛而不輟とんひ。又（巻十三）山僧聲如念佛。とぃふ。此山僧も亦形狀

といたさまと。第二巻ふ出ル。佛法僧の鳥ちるべし

○暴々雞

第二巻ふ圖を出し。鶻嘲ふ充リる カムリドリと。海島逸誌四巻ふ。暴々雞形如鴿。大與家鴨等。身高五六寸。而冠上羽毛。高至徑尺。色青藍柔膩。如孔雀之屏。見人則展其屏。以相迎。云蓄之可辟邪。却火災。絶白蟻。和蘭及甲必丹。圍囿。必羅致畜養焉。とゝ。ふ能的當せり

○有足蛇

第三巻。蛇足の下ふ。有足蛇の事を載ル。古も出し。

り。百練鈔五巻ふ。

故二品親王白川堂善勝寺前庭有足蛇出來為大被喰殺

と見えたり。又本朝世紀第二冊ふ。

元年八月ふ。兩頭蛇出し。と見ゆ。四編第十巻。枳首蛇の下ふ詳ふ。

鳥羽天皇保安三年。五月十四日

朱雀院天慶

豹

和名鈔八巻十ふ。日本紀私記を引きて。奈賀豆可美の訓なるべし。和産ふ。又唐山ふも稀なるゝ。朝鮮ふハ産ルとゝ。其皮。今舶來のも好き。毛柔細ふ

〻て厚く。褥やうに上品形り。其質黄赤色其斑黑色
ゐて小さく。中空く環の形と形せり。故ゆ金錢豹
本草綱目 ゝゆゆ。又白豹。陸璣詩疏○白質黑文者 赤豹。同上○赤質黑文者 玄豹。山海經
青豹。通雅引洞冥記○今本不見 土豹。本草衍義○無文者 艾葉豹。本草綱目○文如艾
葉者 金線豹。同上○文如金線者 等の類一形ゐ。總て豹の類〻。其
性虎より猛形りゆゆ。天保元庚寅の年朝鮮より活
豹一隻を來ル。即金錢豹なり。其年の四月。京摂の間ゆ
て觀物ゆ備ふ。六月伊勢ゆ到る。形狀圖の如く。大さ舶
來の中帛皮をもて較ふゆ。稍小なり。嘯くゝ口中

赤くして朱を塗が如し。一日に雞三隻づゝ食ふ。其
又魚肉を與ふるに小魚を食はず。棘鬣魚。此目魚類
社大形なるを食ふ。七月に至りて斃る。同國矢川にて皮
を剥き肉を食ふ。味輕くして美なり。本　邦にて。豹の生肉
を食ふに。古今未曾有の奇事なるべし。

四足雞

天保二年。辛卯の夏。五月二十七日。本州在田郡、宮崎の
莊。箕島村の栗山長二郎が家に。四足の雞雛を生ず。其
日に死す。同月三十九日。同郡の醫。山田正元より。鹽

藏に贈りて。本藩醫學館の產物會に出ず。按るに此
を牝雞抱卵の時。鸞卵を抱きて變化する物なり。
稀に一體二首四足。或は三足と化生する物なり。皆
長く育ることを能はず。此鸞卵を形毎に產むものなり。
必長大すれども。破るゝに中に二黃子なり。殊に鬪雞（レウトル）鶉雞（ダウトル）
に多し。唐山にもこれあり。明の王圻が續文獻通考（卷二百二十四）の
物異考に。元順帝。至正十八年戊戌春正月。錢塘盧子
明が家に雞。伏九雛。一雛有四足。二足在翼下。不數日皆死
而各家亦無他異　又（同卷）明孝宗。弘治十四年春。湖廣等

容縣紅柿村民劉福家雞生雛三足。清の勞大與ゲ甌江逸志（説鈴前集巻三十九）ハ至正庚辰四月九日崔廉譙同知家雞生四足。具五指越五日商周都治中家雞亦生四足又崇禎甲申何家園居民有雞雛四足送余驗視清の董含ガ蕓鄉贅筆（巻下）ハ華亭尹署雞青丁雛四足後二足聯接尾間不能行立有周牛館於其家親見之ゑどの文見えたり。

僕奈

延喜式（巻三十七）典藥寮ハ僕奈と云ふ藥品を近江（七カ）越前（四カ）越後（二カ十三）因幡（一カ）等より貢ぐる事を載ル。慶安元年の刻本ハ訓ガ〜。源齊恒君の延喜式考異（巻六）ハ京本の式越前越後の條及び貞享本の式越后の條等ハ僕ルベキグサの訓ガりと云ヘリ。又本草和名（巻十）外藥の部ハ撲奈ヲ作リ和名久留倍岐奈（クルベキナ）と云ふ。又伊呂波字類抄（巻六）ハ撲ヲ樸ヲ作リて訓同〜。因幡の安惟親恭菴ガ因幡志（巻末）ハ僕奈を載セて撲樕山奈ノ二種ヲ脫字シテ一種ニ句シタルニ中と云ふハ大なる誤ガり。按ずるハ今越後ハクルメキナと云ふ草ガリ。訪問ずるに花姑（ウヒヤ）ハて延年草一名藥當子（ヤクタウシ）一名北方

キトク 奇特圓 署して奇特圓とも名ふ。すなわち エレサウ を呼ふ草なり。諸國深山幽谷に産ス。殊に東北國に多し。又延齢草 大和養老草 伊勢 エレグサ。阿波 エグサ。同上 エレンサウ。河内 立アラヒ。武蔵 三ツ葉 イチゴ。越後 三ツ葉アフヒ。越中 三ツ葉人参等の名なり。春苗を生ず。形状ツクバ子草に似て大に。葉は圓尖にして傘の形を形ス大抵高さ一尺餘。北國の物は。一茎高さ三四尺。葉の大さ三葉にて徑り又七八寸に至る。夏月三葉の中心より短茎出て花を開く。三瓣にして大さ一寸許。常品は紫黒色なり。日光山中には。淡紫色白色等なり。富士山にも。緑色あり。皆花後圓實を結ぶ。熟して黒色。中に細子なり。根は蕺未の如く。白色にして味苦し。故に寒邨窮郷に。用ひて積を壓し。蟲を殺ス。本草啓蒙 八巻 に。大和村民此根を乾シ貯へテ。傷食ノ藥トス。市中ニ或ハ偽テ。蕺未ニ充テ。或ハ唐藜蘆ニ雜ユトいへり。漢名 [illegible] 考へ[illegible]。式の僕奈 に。即此クルメキナ [illegible]。クルメキ をクルベキの轉なり。和名鈔 巻十四 蠶繭具類に。反轉を久流閉枳 と訓セり。和訓栞 前編 八巻 に。くるへなし。糸をくる

とくる具をもて名つくり。今も東國ふり去の公へり。所ゝよりて。かせをもて。まひぢ〳〵もいふ。枕草紙に。くるべき物とかへり」と。ゑえくり。此草三葉一蒂反轉形を形をもて。クルヘキナと名づく〳〵古名。今ハ越後ハ残つて形をつ〳〵

附録二終

蘭峽小原先生輯録
桃洞遺筆
自三編至十編
各三冊 近刻

嘉永三年庚戌十一月刻成

京都富小路三条上ル 桝屋勘兵衛
仝 三条寺町西ヘ入ル 丸屋善兵衛
江戸日本橋一丁目 須原屋茂兵衛
仝 二丁目 山城屋佐兵衛
大阪心齋橋北久太郎町 河内屋喜兵衛
仝 安堂寺町 秋田屋太右衛門
若山 駿河町 阪本屋喜一郎
仝 湊昌平河岸 阪本屋大二郎

発行
書肆

京御書林 池内兵衛